山丹交易とカラフト諸民族の状況

SOME ASPECTS OF PEOPLES IN SAKHALIN UNDER THE INFLUENCE OF SANTAN TRADE

児島　恭子*

KOJIMA Kyoko

This paper is a sketch of visits of "Santanjin" from Amur River region to Sakhalin, intend to trade, and relations of "Santanjin", Nivkh, Uilta and Ainu, during 19 century. According to analyze some reteratures on Santan trade, "Santanjin" contains Nivkh and Ainu not only U'lch. In Sakhalin, customs of dwellers differ from region to region, they made contact with each other. Oral legends prove such aspects. In the end, it is stated that Japanese students have to do in the study of northern culture and history.

はじめに

山丹は、日本の近世の文献にのみ現れる言葉で、黒竜江下流域の地域名もしくはそこに住む人々のことを指している。その語源は、黒竜江の現地でジャンタといわれたもので、その交易活動に携わったアイヌがサンタもしくはチャンタと言ったのが日本語で山丹と表記されたのである。当時、山丹人は満州の品物を持ってカラフト[1]に渡来し、北の方ではニヴフやウイルタ[2]と、南の方ではアイヌと交易を行った。また、ニヴフとともにアイヌも山丹地方にあった清朝の仮府に朝貢し、その地で交易も行った。カラフトアイヌの文化が北海道アイヌの文化に比べて大陸色が濃い訳である。本稿では、アイヌ民族を中心にした北方研究のノートとして、山丹交易に関連する史料や口頭伝承に散見する、カラフトでの民族接触や文化変容の状況を述べる[3]。これに関しては、高倉新一郎1939が基本となる研究を行っている。

1．カラフトへの山丹人の渡来

間宮林蔵は『東韃地方紀行』において、サンタンはただ一種の者でなく、スメレンクルと称する者、ジャンタと呼ぶ者があり、部落が分かれていると記した。上原熊次郎も『蝦夷語集』で「山丹人」の項に「チャンタ」と「シメルンクル」の二つをあげ、「ウネンクル」という名称も入っている。山丹人はサンタ、チャンタに限らない。シメルンクルはスメレンクルのことであろう。山丹のキチ、コイマンチャ、モンコレは「ウ子レンクル」といい、言語が少し異な

＊昭和女子大学文学部日本文化史学科非常勤講師　Part-time Lecturer, Dept. of Japanese Culture, Faculty of Letters, Showa Women's Univ.

るという記録（中村小市郎1801）があり、「ウ子レンクル」はウネンクルと同一のもので黒龍江のニヴフであるらしい。このように山丹人といわれていたのは一つの民族に限られていなかった。それを前提に山丹人をみていかねばならない。

1801（享和１）年白主に通詞役で交易に来た「山丹人」カリヤシンは、実は宗谷トウベツ生まれの「唐太夷人」であり、山丹へ行って24年になり、キンチマという所に女房と子供がいたという（中村小市郎1801）。彼の場合は、本来はアイヌであるが見かけだけでなく婚姻によってウリチの一員となっていたことが推測できる。また、タイカサン（地名）からカラフトに渡来してきた「山丹人シヨツカレ」はシメレンクルだという（近藤重蔵1804）し、その他、山丹人の一行中に蝦夷地で生まれた者が混じっている記事は所々に見られる。カラフトに交易に来た山丹人の出身地は、当時ウリチ（オルチャ）の居住地だった（白鳥庫吉1940）ことから、山丹人は原則としてウリチであると考えられる。しかし山丹人の中にはウリチ、ウリチ化したニヴフ、ウリチ化したアイヌなどが含まれていたのであった。言い換えれば、史料には厳密な民族差は示されていないのである[4]。

彼らの渡来人数（交易所に来た人数）は下記のような規模であった。

文化６年	1809	３艘２０人
〃　７	1810	７艘６０人
〃　８	1811	５艘３８人
〃　９	1812	５艘４０人[5]
文政４	1821	７艘５５人[6]
天保７	1836	「夏分漕来る船は６７８艘参候よし」[7]
弘化３	1846	７艘４５人[8]
嘉永５	1852	４艘[9]
〃	1853	なし
安政１	1854	なし[10]
〃　２	1855	１艘[11]
〃　４	1857	１艘　４人[12]
〃　５	1858	５艘４６人[13]
万延元	1860	７艘５４人[14]
文久３	1863	２艘１７人[15]
元治元	1864	２艘１０人[16]
慶応元	1865	５艘３９人
〃　２	1866	１艘７人
〃　３	1867	５艘３１人[17]

山丹人は１年に１艘から７艘で、１艘に7～8人が乗って来たようである。そしてほぼ全員男性である[18]。

安政２年６月に交易を行ったヌンテ等６人は前年12月にクシュンコタンに来着している[19]。カラフトに着いてもまっすぐ交易所に行くのではない。チカテイノ、フホナアイノらは慶応１年６月９日にウショロに来たが、同年７月２０日に帰途ウショロに着き、２８日出帆した。しかし彼らがいつカラフトに来て去ったのかは不明である。またユイトノらは、慶応１年７月２日にウショロに着岸し、トンナイでの交易を終えて帰途８月６日にウショロに帰着、出帆しているのも同様である[20]。彼らはテン皮を求めて、アイヌなどからそれを得るばかりでなく滞在して猟を行った[21]。『蝦夷拾遺』（天明年間1781－89）は「ウソロ、ウツシウ、ホロケシ、ホロコタン、ヲツチシ屋舎五十余戸半は山丹の商店にて山丹人常に来たり居す　島中を巡る山丹人の商船もこの所にて造ると云ふ」と述べる。
テンは冬に猟をするのであろうから、交易所に到着しているのは夏が多いところから少なくとも数カ月から半年は滞在することが珍しくなかったと思われる[22]。

山丹交易の終末はロシアの中国侵入によるといわれているが、それ以後もカラフトには山丹人が存在した[23]。邦領南カラフトにおける調査

で、アイヌ以外にオロッコ、ニクヴン、キーリン、サンダー（＝山丹人）、ヤクーツの人口が記録されているが、彼らは幕末頃、北から移住してきたらしく、ニクヴンのある氏族の祖母はオロッコであるとか、かつてサンダー居住地方面に長く居住していたため、その影響を強く受けているとか報告されている。昭和７年樺太敷香支庁調査ではサンダーは３戸11人であった（樺太庁1933）。

２．民族間の風俗と異同

さらに、記録により[24]、カラフトにさまざまな名称の住民がいたことがわかる。アイノ、ヲロコ人（ヲリカタ人）、スメレンクル、レプンヲロッコ、ルモウ、ニクブン、タライカ、シルンウタレ（シルンクル、シルンアイノ）、コンデケ、キーレン、サンタン人、山靼スメレン等である。これらは必ずしも異なった民族毎の名称ではない。地理的な分布については断片的に記されている（例えば松浦武四郎1858）。

中国の史料でも民族の違いは明確でない。清時代、1731（雍正10）年以後に彼らを統括するようになった三姓副都統衙門の档案（辺境との往復文書）の中には、カラフトに居住する民族として「庫頁費雅喀」と「海島居住之庫頁」がある（遼寧省档案館・遼寧社会科学院歴史研究所・瀋陽故宮博物館1984）。費雅喀は一応、ニヴフと考えられているが、そうとばかりはいえない（佐々木史郎1989）。民族的帰属は不明である。１９世紀のカラフトに、アイヌ、ニヴフ、ウイルタ、ウリチが住んでいたことはロシア側からも確認できる。それには、ウリチの男がカラフトに行きウイルタの女と結婚し、子供が父の故郷であるアムールに帰ったという婚姻関係が含まれている（スモリャーク1987）。

山丹人は朝鮮に似ている（佐藤玄六郎1786）といい、頭髪は三つ編みにして下げ、末に輪金を掛け、衣服は紺色又は犬皮の筒袖、ボタン仕掛け、組下白木綿（三保喜左衛門談1842）、ヲロッコ、スメレン等の夷人は山丹風俗なので山丹視される（坂倉源次郎1739）という。カラフト西岸のニヴフには、風俗がウリチ化している者があった。使用している言語の差異も史料上でははっきりとはわからない。例えば松田伝十郎はシルンクル（山靼風俗、奥地モシリヤに居住）について、「言語不通」と言いながら「言語の内夷語少々宛交り」ともいい、風俗は化しているが、「元来アイノに相違なきかにも相聞候」と言っている。タライカ（東岸居住）は、平常、ヲロコや近辺の夷人と往来し、西地夷人や山丹などの所には行かない、宗谷やオムシャに行くようになってから追々夷人風俗になったという。

ところで山丹人の名は、元治２年「山丹人渡来一件」（道立文書館）に記載されているものでは以下のようなものである。（　）は別の文書による同一人物の異なる表記である。アニカ・イワンノ・ハントンノ・サルハレノ[25]、ケウケウ・カレツカ・カムイ[26]、フコンヌ・カラシ・ヲナンケイヌ・テンカ・アブタカ・シヨンゴ・ヤランカ・クサホノ・ソロクノ・クエンカ・ヲハニカ[27]、チカテイノ・フホナアイノ・ホトライ・ククライノ[28]、チカッテン（チカテイノと同一人？）・ホットクル・ホホレヌ（ホホレン、ホホレンヌ）・ゴヲル・ココニヤン[29]、ヤラカ・カフト・コサホノ・ミチカ・ハセカ・カアサ・コリユノ・クイカ・マキラウ（マキタウ）・ニハクン・ヲハカ・トンカ・ヨクンノ・アムタカイ・ホナンケン・シチウカ（シチワカ）・リンコ（ソンコ）・テンカ・カラアシ[30]、ヲラヘエノ（ヲラエアイノ、ヲラペエン、ヲラヘイノ、ヲラベヌ、ヲラヘヌ、ヲラベン）・レッフガノ（レトウ カ、レツプガ、レフガノ、テレツボク、チレツホカ、レツポカ）・エムケノ

（アムケノ、エメゲヌ、エムケー、エルホノ、エルポク、エルポノ、アルボー、アルボノ）・エニ（エコ）・ウエノカ（ウエヌカ、ウエンノツカ）・タンホノ（トンボー、トンボノ、タンポノ）・ホフカノ（ホーカノ、ホツカノ）・ヌータノ（ヌンタ、ヌンダ、ヌンター）[31]、チワケアイノ（チワケアイノ、チハケノ、チエワケンヌ）、イヘチ（エベチ、エブチ）・タラカ（タラッカ、タラカニ）・ニシコクカノ（ニシロクカノ、イシクマノ、イミクマノ）・ヒリカ（ピリカー、ビリカ、ヒリカノ）・ホムッカ（ホフヌ、エミツカ、ホムツカ）・チロカ（チロツカ）・キリコノ（キロコシ、キリコボヌ、キリゴボヌ、キリコヌ）・アリカヌ（アリケノ、アリケヌ、アリヂヌ、アリゲヌ）・アチ（アチー、マチ、アチノ）・チヨロウクン（チヨロクニ、チヨロウク、チレソコヌ、チレリコヌ）[32]、ユイトノ・チラッカ・クチ井ヌ（クヂ井ヌ）・エミラチヂヌ・子トノ・ハケノ・ヲジロノ（ヲジロニ）・サシゴノ・マヂコ（マツコ、マチコ）・アヂチカ（女）・トカ・セタッカ（セタカ）・ボノコ井（ホノコ井、ホノヲ井）・チヨボツコ（チヨホッコ）・トシコメー（トシコノ）[33]、ビチン[34]、アレー（アレノ）・タアラ[35]、ハンカ・妻カミカ・娘ココヨツコ・弟センベンヌ[36]、ホトクウリ・シヨシヨンコ・タフサ相ノ・ランバツカ・ハツカイヤ・ホウリ[37]、カンビラアイノ・ワンカ・シヤニカ[38]

これらの山丹人の名の中に語尾にアイノという名があることは注意されなくてはならない。また文書によって同一人がヲラベンからヲラヘアイノまで差があるので、一つの文書しか例がない人名の中には隠れたアイノがいるのかもしれない。彼らの存在はアイヌと山丹人との関係を示唆するし、交易に訪れる山丹人は同じ人が何度かやってくることが史料に記されている名前からわかる。

19世紀のカラフトの諸民族は、現代の民族と直結する民族差をもちながら同じ民族内に言語や風俗の小差があった。

3．口頭伝承にみる異民族の関係

カラフトにおいてアイヌは山丹人に対して交易による債務を負っており、山丹人はよそ者でありながら優位に立っていた。中村チヨ口述1992に次のような話がある。「昔は山丹という人間がたくさん敷香あたり来て、新問とか多来加とかさ行って宝物やらなにやらもって来て、アイヌたちさ貂皮とばくるんだとさ。そしてあるところ、アイヌさ貸してやったものが、その年とれなかったんだか、どうしたんだか知らんけども、宝物、アイヌが借金してるんだと、山丹から。そして、あるうちの娘を、借金代りに、つれていったんだな、娘を。娘は山丹の国さつれて行って、アイヌだから、もらうもしないで、嫁さんにもしないで、唯乞食にして使って使って、あまり難儀して死んだんだか、いじめて死んだんだかしらんけども、死んだんだと、そのアイヌの娘が、な。（略）」〔268 ページ〕。当事者たちが不平等感をもっていたのであれば対等の交易は持続できないのではなかろうか。

民族間の接触を知る資料として、文字によらない口頭伝承があり、山丹人の話もある。異民族間の結婚によって[39] 子孫に異民族の伝承が伝わるとか、ウイルタがアイヌの所に来た時はアイヌの言葉を使った（中村1801）という状況の中で育まれた伝承であろう。山丹のシャーマンの話もある[40]。最近では荻原眞子1995が東北アジアの神話・伝承をロシア文献から日本語訳し解説しているが[41]、サハリン・アムール地域の民族の伝統文化は起源を異にする要素が多くあり、神話・伝承にも文化の多源性が認められるという。その中には勿論満州・中国からの影響も含まれている。

このような状況の中でこそ口承文芸としてのアイヌの英雄詞曲が生まれることが理解できる。主人公の戦いの相手の中にはサンタもいる。サンタがアイヌではなく、大陸の方に住む人間であることが明らかでありながら、英雄詞曲の中で特に異質な存在ではない。これは英雄詞曲の形成にかかわる重要な要素である。山丹人が英雄詞曲に組み込まれたのは北海道よりもカラフトにおいて行われたと考えるべきであろう。その時期が問題となるが、オホーツク文化の担い手がニヴフであること（菊池俊彦1995）を認め14世紀初頭までのアイヌとニブフとの接触と抗争をモチーフとして近世までに北海道で成立したという説得的な説（榎森進1992）が出されている。にもかかわらず、中国史料にみえるクイをカラフトアイヌという一つの民族と解釈してよいのか、英雄詞曲の原型のモチーフは何なのか、北海道アイヌ的でない要素をどう解釈するのか、疑問が残っている。また、英雄詞曲は他の口頭伝承のジャンルとの比較で見ることも必要であり（狩猟採集民の生活にかかわる思想と無関係な内容であることが他のジャンルと全く異なる）、中世日本の叙事詩や劇の影響といった、語りの形式の問題提起（大林太良1991）も考え合わせなくてはならない。

北海道アイヌのオキクルミ神話とコロポックル伝承は、時代を異にするがともにサハリンやアムールランドとの（前者は山丹交易によって代表されるような）交流を背景として生まれたという仮説も出されている（大林太良1995）。

おわりに

サハリンの諸民族の歴史や文化の研究は今後研究の国際交流により進歩するにちがいないが、まず日本の研究者ができることで基本的な考察がまだ不十分な状態である。日本語を介した北方少数民族の言語資料の分析においては意欲的な研究がなされている（藤代節1995）。サハリンに関する日本の近世の史料には、北蝦夷地の行政文書が多くあるがその中には民族誌として興味深く貴重な情報が含まれている。山丹交易関係史料は特にそうである。17世紀から19世紀にかけてのことである文献と口頭伝承の情報を収集して分析することが、北方研究の基礎になると考えられる。現在、この分野の研究は佳境に入りはじめた、といえるようにしたい。

註

1) 本稿ではカラフトと記した場合は歴史的な地域名として、サハリンと記した場合は地理的な意味での使用とする。
2) 民族名は自称と、歴史上の用語として他称を併用する。他称(文献にみえるもの）スメレンクル・ギリヤーク・費雅喀は自称ニヴフ、他称オロッコは自称ウイルタ、他称コルデッケは自称ナーナイであるが、現在の民族とずれる場合もある。
3) 1991年までの日本における山丹交易に関する研究文献は海保嶺夫1991の表１にまとめられている。研究史については矢島睿1995があり、「別表　山丹交易に関する記述のみられる主な近世史料」が付されている。
4) カラフトから海峡を渡って行く船は、コルデッケの造った船を用い、山丹船というと記されている(間宮林蔵1856) が、コルデッケをもサンタと呼んだからなのか、サンタ地方に行くための船だからなのかはわからない。
5) 文化年間の資料は松田伝十郎1806、岡本堅輔1898
6) 高倉新一郎1936：268
7) 「北陲対問」高倉1936による。
8) 「簡約松浦武四郎伝」高倉1936による。
9) 「村垣淡路守日記」　高倉1936による。
10) 高倉1936：267，268。安政２年『北蝦夷地御

引渡目録』の中に「丑年山靼交易品調書」という文書がある。この丑年は、嘉永6年（1853）である。これには66人による200回の交易が記されている。末松保和は同じ内容の交易の品名と数量を集計した文書「山靼交易品」（『丙辰雑綴』巻六　東京大学史料編纂所所蔵）を天保14年（1843）の交易としているが（末松保和1928）それは誤りである。安政2年の「北蝦夷地申上書」に「山靼人昨今両年来着不レ致候ニ付、一昨丑年交易調書云々」と記されている（海保嶺夫1991：2）のである。嘉永六年の交易者たちはいつ来島したのだろうか。

11）『北蝦夷地御用留　安政3年辰3月　白主会所』の内「安政2年山靼交易品調書」（道立文書館蔵、文書名は件名目録による）

12）『御用留　北蝦夷地仕出之部　安政4巳年3月　志良主御用所』（道立文書館蔵）

13）『北蝦夷地引渡目録　安政4年　白主附』の内「山丹人交易取扱手続の件（安政5.5）」（道立文書館蔵）

14）『山丹人持参品調書　安政7申年　ウショロ御用所』（道立文書館蔵）

15）『山靼持参品調書　文久3年亥6月（道立文書館蔵）

16）『山靼交易品取調書』の内「元治1年11月山靼交易品取調書」、『山旦人渡来一件元治2年　御用所』の内「山旦人交易品調書」（道立文書館蔵）

17）『山旦人渡来一件　元治2丑年より　宇諸呂御用所』（道立文書館蔵）

18）女性も来たことはあるが、交易はしなかった。

19）『北蝦夷地御用留　安政3年辰3月　白主会所』の内「安政2年山靼交易品調書」、「安政2年12月27日山靼人小使6人クシュンコタンへ来着、交易に付松前家来申上書」（道立文書館蔵）

20）元治1年「山旦人渡来一件」の内No. 9・No. 26・No. 29。Noは『北海道所蔵公文書件名目録2』（北海道総務部行政資料課1973）による。以下同じ。

21）山丹人はアイヌの家に居候していて、道具を勝手に使い、獲物があっても礼をせずに横暴な振る舞いをしたという（松田1806）。

22）「蝦夷唐太島之記」（松前平角）によれば山丹人の来住は大体5、6月中とされている（竹内運平1933）。

23）樺太アイヌの浅井タケ氏（1994年没）の体験談。また、ニヴフの中村チヨ氏の父は山丹人で、樺太に生まれて大陸で育ったという。そして20代のとき敷香に来てニヴフの女性と結婚してチヨ氏はニヴフのケヌブン氏族の一員として1906年敷香で生まれた。山丹人の渡来は続いていたのである。

24）松浦武四郎1858、近藤重蔵1804、松田伝十郎1806、中村小市郎1801、間宮林蔵1856。

25）No. 36

26）No. 2・4・23・25

27）No. 14

28）No. 9・26・29

29）No. 10,（No. 9・29と関連）

30）No. 11・18

31）No. 12・15・17・22・28・30・31・32

32）No. 13・15・17・22・28、チワケアイノらはスメレンクルとも記されている。

33）No. 19・20・21・34・37・38

34）No. 24（No. 23と関連）・No. 39

35）No. 33・29

36）No. 35・29

37）No. 39

38）No. 40

39）　潟久治1981にはサンタン人（ウリチと思われる）とウイルタとの通婚を記す。スモリ潤－ク1987参照。

40）山本祐弘1968。ギリヤーク民話25「祭文の腕くらべ」。児島恭子1989参照。

41）アイヌが主人公となっているニブフの伝承

「膣に歯をもつ女たち」も収められている。また、中村チヨ口述1992には「臆病者の山丹」「昔のアイヌのお話」アイヌのキツネの話2話、「酒好きのアイヌの神様」、オロッコの話2話、アイヌとオロッコの戦争の話2話等が収録されている。

文献

上原熊次郎　文化年間(1804～1818)『蝦夷語集』

榎森進1992「オモロとユーカラ」『アジアの中の日本史』Ⅳ　東京大学出版会

大林太良1991「アイヌのユーカラとその歴史的背景」『北方の民族と文化』山川出版社

――1995「神話論」『岩波講座 日本通史』第1巻

岡本堅輔1898『北海道史稿』

荻原眞子1995『東北アジアの神話・伝説』東方書店

海保嶺夫1991「『北蝦夷地御引渡目録』について-嘉永六年（一八五三）の山丹交易-」

『一九九O年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館

樺太庁1933「アイヌ外土人調査」『アイヌ史資料集』6

児島恭子1989「18,19 世紀におけるカラフトの住民-サンタンをめぐって」北方言語・文化研究会『民族接触』六興出版

小林真人1995「松前藩による山丹交易品の独占とその流通」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館

近藤重蔵1804『辺要分界図考』『近藤正斎全集』第1巻　国書刊行会

坂倉源次郎1739『北海随筆』(『日本庶民生活史料集成』4所収)

佐々木史郎1989「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」『国立民族学博物館研究報告』14-3

佐藤玄六郎1786「蝦夷拾遺」『北門叢書』1

白鳥庫吉1940「東韃紀行の山丹について」『池内博士還暦記念 東洋史論集』(『白鳥庫吉全集』5再録)

末松保和1928『近世に於ける北方問題の進展』至文堂

スモリャーク，A．V1987「十九世紀サハリン島のアイヌと同島およびアムール河下流域の原住民との交流」灰谷慶三訳『国立民族学博物館研究報告』別冊5

高倉新一郎1939「近世に於ける樺太を中心とした日満貿易」『北方文化研究報告』2（『アイヌ研究』再録）

中村小市郎1801「唐太雑記」『犀川会資料』21号

中村チヨ口述・村崎恭子編・ロバート・アウステリッツ採録・著1992『ギリヤークの昔話』北海道出版企画センター

藤代節1995「昭和6年樺太庁敷香のヤクート語資料の分析-日本語による北方『少数民族』言語資料へのアプローチ」『学術情報センター紀要』第7号

潟久治1981『ウイルタ語辞典』網走市北方民俗保存会

櫛浦武四郎1858「近世蝦夷人物誌」(『日本庶民生活史料集成』4所収)

松田伝十郎1806「北夷談」(『日本庶民生活史料集成』4所収)

間宮林蔵述1856『北蝦夷図説』(名著刊行会)

三保喜左衛門談1842「唐太話」(『日本庶民生活史料集成』4所収)

矢島睿1995「山丹交易の研究史とその諸問題」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館

山本祐弘1968『北方自然民族民話集成』相模書房